

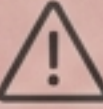
水辺で可憐に咲く純白の尾

絶滅危惧種ノジトラノオ（野路虎の尾）の生態、歴史、そして未来へつなぐ命の記録。





基本プロフィール：ノジトラノオ

	分類：サクラソウ科 オカトラノオ属（多年草）
	学名：Lysimachia barystachys Bunge
	原産・分布：東アジア原産。日本では本州の関東地方以西から九州北部に分布。
	好む環境：日当たりの良い湿地、河岸、湿地周辺の原野。
	保全状況：環境省レッドリスト 絶滅危惧II類（VU）

土地造成や湿地の乾燥化により、かつて野路を彩ったその姿は現在激減している。

三つの名前が語る、姿と歴史の物語



和名：ノジトラノオ（野路虎の尾）

「野原（野路）」に咲く、「虎の尾」のように垂れ下がる白い花序の姿から。

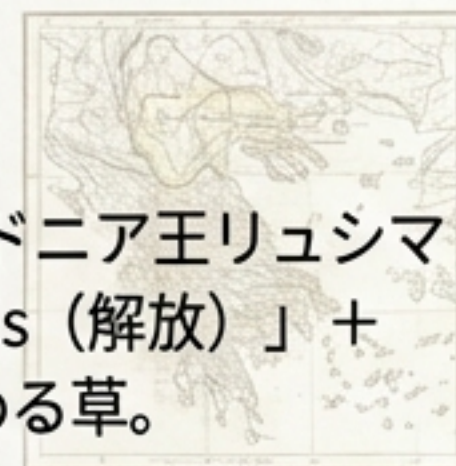
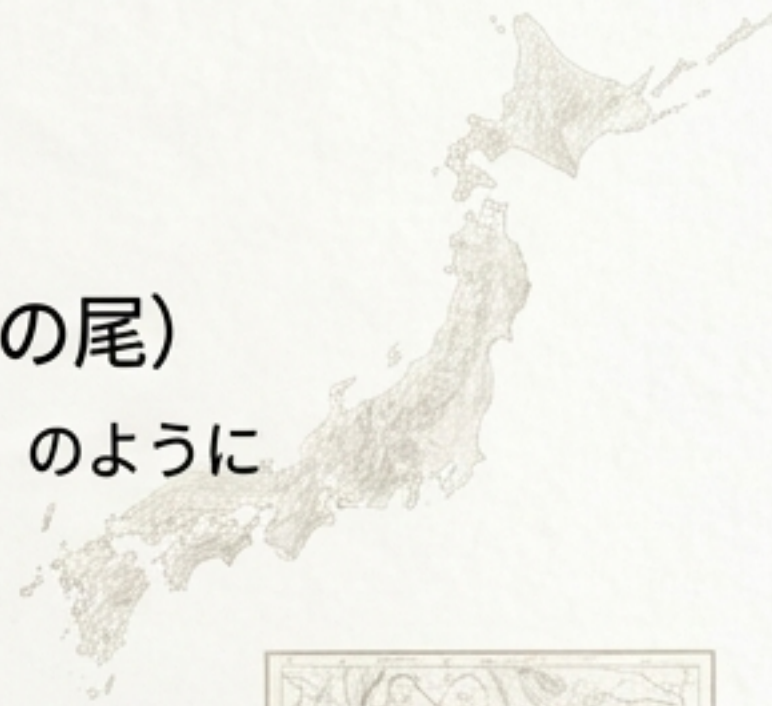
学名：Lysimachia barystachys

Lysimachia：狂牛をこの草で鎮めた古代マケドニア王リュシマコスの伝説。ギリシャ語の「lysis（解放）」＋「mache（争い）」＝争いを鎮める草。

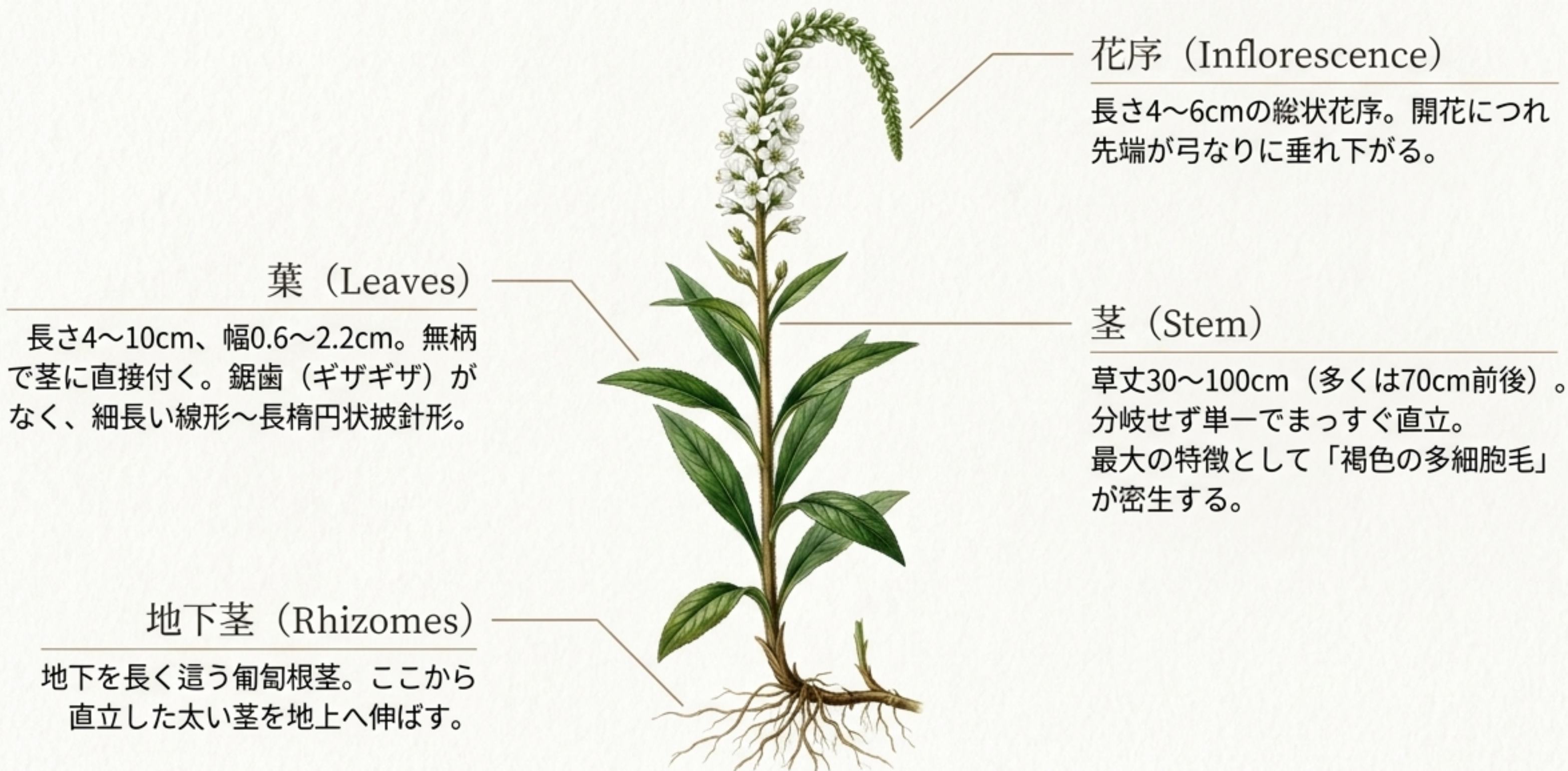
barystachys：「重みのある（barys）」「穂（stachys）」。ずっしりと垂れ下がる花穂を表現。

英名：Manchurian yellow loosestrife

東アジア（満州）に広く分布することから。loosestrifeは「争い（strife）を鎮める（loose）」という学名の直訳。



形態と構造：無駄のないスマートな立ち姿



花序 (Inflorescence)

長さ4～6cmの総状花序。開花につれ先端が弓なりに垂れ下がる。

葉 (Leaves)

長さ4～10cm、幅0.6～2.2cm。無柄で茎に直接付く。鋸歯（ギザギザ）がなく、細長い線形～長楕円状披針形。

茎 (Stem)

草丈30～100cm（多くは70cm前後）。分岐せず単一でまっすぐ直立。最大の特徴として「褐色の多細胞毛」が密生する。

地下茎 (Rhizomes)

地下を長く這う匍匐根茎。ここから直立した太い茎を地上へ伸ばす。

可憐な白い尾と、命を繋ぐ微小な種子

(The Bloom - May to August)



- 花が一方へ偏って咲く（扁側する）性質が、独特の「尾」のシルエットを生む。
- 開花前の先端には、線状錐形の苞葉が密生し、毛のように目立つ。

(The Micro-Details)



小花 (8-12mm)

5枚の花びら（先端がわずかに凹む）と5本の雄しべ。花弁の内側には暗紫色の腺の筋が走る。



蒴果と種子 (Fruit & Seeds)

秋に暗褐色に熟す直径2.5-4mmの蒴果。果皮が縦に裂け、中から長さ約1mmの微小な種子が風雨によって散布される。

近縁種との識別マトリックス

ノジトラノオ（本種）



花序の先端：やや丸みを帯びながら、弓なりに垂れ下がる。

葉の幅：0.6～2.2cm。明らかに細長くスマートな形状。

オカトラノオ



花序の先端：先端に向かって滑らかに細く尖る。垂れ下がる。

葉の幅：2～5cm。広く、ふっくらとしている。

ヌマトラノオ



花序の先端：直立したまま。垂れ下がらないため一目で区別可能。

葉の特徴：（本種同様に細いが、花序の立ち上がり方で判別）。

奪われる水辺、失われる自生地

ノジトラノオは「日当たりの良い湿原や原野」という、極めて限定的で変化しやすい環境（遷移初期）に依存している。



理想



脅威



消滅

- 土地造成や道路工事による直接的な破壊。
- 環境の変化による「湿地の乾燥化」。
- 放置されることによる大型木本の侵入（日照不足）。

環境省レッドリスト 絶滅危惧II類（VU）

ただ「自然のまま」にしておくだけでは、この植物は生き残れない。

共生のアート：人の手が守る自然

渡良瀬遊水地の「ヨシ焼き」

定期的な野焼き（火入れ）が草地の遷移と大型木本の侵入をリセットする。人間の火が、ノジトラノオに必要な「日当たりの良い湿地」を辛うじて維持している。



静岡県掛川周辺の「茶草場農法」

茶畑の敷き草を採取する草地（茶草場）として人が手入れを続けることで自生環境が保たれる。古くから茶室に飾る「茶花」として愛されてきたされてきた文化的歴史。

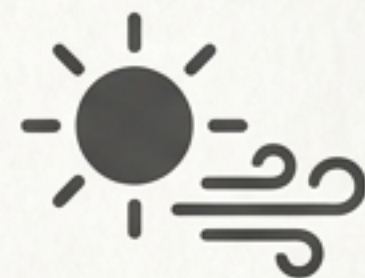
ノジトラノオは、人間と自然が
適度な距離で関わり合う
「里山的な生態系」の象徴である。

栽培のガイドライン：湿地環境の再現



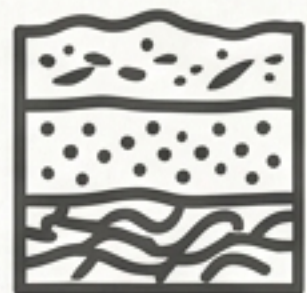
水やり (Water) - 厳注意

湿地性のため「水切れ厳禁」。春～夏は受け皿に水を張る「腰水（こしみず）栽培」を推奨。※夏場は水が腐らないようこまめに交換。



環境 (Environment)

年間を通じて日当たりと風通しの良い場所。野草のため多肥は不要。



用土 (Soil)

水はけと保水性の両立。赤玉土・鹿沼土・腐葉土の等量混合。



冬越し (Wintering)

寒さに強い宿根草。秋に地上部が枯死したら地際で刈り取る。休眠中も地下茎が乾燥すると枯死するため、冬も適度な水やりが必要。



花言葉に隠された、生物学的な真実

花言葉：「朱に交われば赤くなる」

一見ネガティブな教訓に聞こえるこの言葉。
実はノジトラノオが持つ「柔軟すぎる生物学的特性」に由来している。

〔ノジトラノオ〕 × 〔オカトラノオ〕 = ノジオカトラノオ

〔ノジトラノオ〕 × 〔ヌマトラノオ〕 = ノジヌマトラノオ

野外で同属の植物と極めて自然交雑しやすく、自生集団が置き換わってしまうほど
周囲の環境（他種）に染まりやすい性質を、見事に言い当てた花言葉である。



水辺でひたむきに揺れる、白い軌跡

環境の変化に翻弄され、他種と交じり合いながらも、確かな命を繋ぐノジトラノオ。
人間の適度な介入という「思いやり」がなければ生きられないこの可憐な植物は、
私たちが自然とどう向き合うべきかを、静かに教えてくれている。